

ノダ文の「原因・理由」提示用法の変遷について

幸松 英恵（東京外国语大学）

1. 本発表の目的

現代語のノダに見られる諸用法の中で、しばしば典型として挙げられるのが「事情」や「説明」を表すといわれるノダ文であり、その中でも、「昨日は学校を休みました。風邪をひいたんです」のように「原因・理由」を提示するノダ文が代表例とされることが多い。しかしノダ文が「～ハ～ダ」という名詞文に準ずる構造を基盤として成立したと考えると¹、「原因・理由」の提示がノダの中心義になっているのは奇妙なようにも思える。時間的・空間的に隔たった2つの事態を「学校を休んだのは、風邪をひいたのだ」とノダで結ぶのは、典型的な〔主題・解説〕構造としては違和感を覚えるためである。

本発表では、ノダ文の定着期である近世期（江戸語）のノダの用法を観察し、現代語のノダ文の代表例と言われている「原因・理由」の提示は、当時としては一般的でなかったことを明らかにし、近代語からその提示が広がった契機について仮説を述べる。

2. 先行研究

文法概説書では、現代語ノダの中心的な用法を「事情」や「関係・関連づけ」といった用語で示しつつ、さらに下位分類として「原因・理由」を表す場合と「言い換え」を表す場合を挙げることが多い²。幸松（2012）でも、現代語ノダの用法を著した際には、「事情」を表すノダの下位分類としてこの2つを分けて記述していた。

(1) 「僕が出る！」叫んで、亘は受話器に飛びついた。昨日と同じように、一発怒鳴ってやろうと思ったのだ。（幸松 2012:35）

(2) このシステムは恐ろしく単純で、その枠の外に出るとすぐに排除されてしまう。つまり、簡単に殺されてしまうのだ。（幸松 2012:40）

(1)は「怒鳴ってやろうと思った」という感情が湧き、その後で「受話器に飛びついた」という行動に移ったのであって、両者は因果関係にある。対して(2)は「すぐに排除されてしまう」と抽象的な表現をしておいて、「つまり」という接続詞で繋ぎ、「簡単に殺されてしまう」と、「排除」が意味するところを具体的に述べ直している。このとき「排除される」と「殺される」ことは同一事態の言い換えである。

1 本発表では、ノダ文の構造について、田野村（1990:1）の次の言説にしたがう。「（中略）「雨が降ったのだ」という文は、名詞を述語とする主題・解説型の文「～は～だ」の解説の位置（つまり、「～だ」の位置）に、述語を中心とする「雨が降った」という表現が現れたものだとする視点である。「雨が降ったのだ」という文の背後には、ことばの形では表現されていないにせよ、「～は」という主題（例えば、「地面が濡れているのは」という主題）が常に潜んでいる。つまり、「雨が降ったのだ」という文は、次のような構造を持つものと考えられるわけである。「地面が濡レテイルノハ（＝主題）、雨が降ったのだ（＝解説）」。なお同様の把握は、田野村（1990）以前にも、山口（1975:16）、寺村（1984:307）においても示されている。

2 例として、庵（2001:246）では、ノダの「関連づけ」を表す用法の下位分類としてノダが「理由」を表す場合（「昨日は学校を休みました。熱があったんです」）と「言い換え」（「昨日大学を卒業した。今日からは学生ではないのだ」）を表す場合に分けている。日本語記述文法研究会編（2003:199）では、「提示の「のだ」」の「関係づけ」の用法として、「事情の提示」と「換言の提示」を挙げている。

一方で、従来のノダ文研究では「A。B ノダ」に見られる A と B の関係の類型として「原因・理由」関係や「言い換え」関係が言及されることがあったとしても、それは A と B に見られる様々な関係性のひとつとして捉えられており、A と B が時間的・空間的に隔たった 2 事態なのか、同一事態の言い換えなのかという点が特に重要視されていたとは言い難い³。

こうした中、A と B が同一事態か否かがノダの意味を考える上で重要であると明言した先行研究としては、野村(2019)がある⁴。野村(2019:291)では、古語における「活用語連体形+ナリ」形式は、現代語の「連体形+ノダ」文に対応しているとして以下を示している。

(3) 右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなり。

(4) 外で音がしているのは雨が降っているのだ。 (野村 2019 : 291 [図式 1]の一部)

野村(2019:291-293)によれば、古語ナリ文と現代語ノダ文は、どちらも原型として「A は B である」という主部-述部構造を持つとされ、このとき主部である A の方に、より「表面的・感覚的・知覚的な事態解釈」が表れ、述部である B の方に「内奥的・裏面的（事情的）な事態解釈」が示されるという。上例でいうと、主部「右近の司の宿直奏の声聞こゆる」「外で音がする」は、それぞれ知覚的に捉えた事態解釈であり、述部「丑になりぬる」「雨が降っている」が、その事情的な事態解釈になっている。

野村(2019)は、こうした古語ナリ文と現代語ノダ文の重なりを踏まえ、『源氏物語』の中古ナリ文の特徴を明らかにすることによって現代語ノダ文研究における「ノダの中心義は何か」という問いかけに示唆を与えようとしたものであるが、その議論の中で、中古ナリ文には「原因・理由」を直接に表す文がほとんど見当たらないという指摘をしている。中古ナリ文は、上述(3)「右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなり」のように同一事態の再解釈でなければならず（これを野村(2019)では「一事態制約」と呼んでいる）、中古ナリ文で「原因・理由」を表す際には、下例(5)のように「～～理由句～～ナリ」型になる場合が多いという。述部は文脈上で既に与えられた事態を繰り返すので、情報が重複的になるという特徴がある。

(5) 内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだに言はせざなりぬるが、あかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと、贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。(野村 2019:298) (※下線、□の付与は発表者による。□は重複部分を表す)

この野村(2019)の指摘を受けて、本研究では、近世期の資料を対象に用法調査を行い、近世ノダにおいて「原因・理由」の提示用法があるのかどうかを確認した。これまで幸松(2020,2024)では、近世期のノダが「事情のノダ」であるのかどうかに重点を置いて用法を

³ 例として田野村(1990)では、ノダ文の basic 用法として「背後の事情」を表す用法を挙げて、目立つ類型をさらに 7 つ列挙している。1 つ目に「原因・理由」関係、4 つ目に「言い換え・要約」関係が挙げられている。奥田(1990)では、ノダ文による《説明》の関係として「つけたし的」「ひきだし的」の 2 つに分類し、さらに下位分類として A と B の関係別に 14 種を挙げている。その中に「理由」「原因」「動機」「根拠」や「具体化・精密化・いいかえ」がある。

⁴ 野村(2019)での主張は野村(2015)を踏まえたものであるが、本発表では、中古ナリの調査を通して現代語ノダの用法分析に示唆を与える通時的な視点が示されているという理由で、野村(2019)を参照する。

分析してきたが、それにとどまらず、ノダによって繋がれる事態と事態が、時間的・空間的に隔たった 2 事態による因果関係なのか、もしくは同一事態の言い換えであるのかという切り口から見直し、近世ノダで「原因・理由」の提示はどのように表れていたのかを明らかにしようとするものである。

3. 調査と分析

3.1 用例の収集

本研究では、コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用して『日本語歴史コーパス』江戸時代編の人情本（コア、非コア）、洒落本（コア、江戸刊行本のみ）から抽出した、肯定文末のノダを対象としている。ノダカラ、ノダケド等の従属節述語におけるノダ、文末に現れる推量のノダロウは除外している。「この本は私のだ」のように明らかにモノ準体文と判定できる例は除いているが、判然としない例⁵は残した。最終的に得られたノダ文は 223 例である。

3.2 「原因・理由」のノダ

本研究で対象とした近世期ノダ文 223 例の用法を分類すると、「疑問詞疑問文のノダ」が 127 例、聞き手がなすべき行為を示している「当為のノダ」が 10 例見られた。それらを除いた平叙文としてのノダを見ると、ほぼ「事情のノダ」であると判断できそうな例であり、これが 86 例見られた⁶。この 86 例を対象に、ノダが「原因・理由」を表しているのか、「言い換え」を表しているのかを判断しようとした。事態の解釈によって、どちらとも言えそうな例、截然と区別し難い例が存在するものの、いったんは「原因・理由」が 56 例、「言い換え」が 30 例と分けた。

この「原因・理由」であると判定できる 56 例中、実に 46 例が「A。B 理由句 A ノダ」という、文中に理由句を含むタイプであった⁷。

(6) 長「米八さ。んを案じて此御屋敷へも一所においでか

丹「なに／＼そふいふ訳じやあねへが。米八にすこし頼んだことがあつて來たのだ。そんなことよりおめへはまあ。どふしてここへ逃れて來た。(春色梅児与美三編巻の七 1833)

(7) 伝「こうおめへそう腹を立物じやあねへ。畢竟はおめへの為を思ふからいふのだ。なに是が他人で見なせへ。(恋の花染 初編上 1832)

現代語であれば、(どうして來たのかと問われて)「頼んだことがあったんだ」と述べるなり、(腹を立てるな、と言っておいて)「お前のためを思っているんだ」と述べるなど、「A。B ノダ」という形で「原因・理由」を直接提示することが可能である。ところが近世期ノダでは、後述する条件がない限り、「A。B 理由句 A ノダ」型が選ばれている。このとき(6)(7)の述部は前提なので、当該ノダ文では、理由句の方に話題の焦点が当たっている。述部が重複的であるほど、[焦点(新情報の理由句) - 前提(旧情報の述部)] という情報的

⁵ 判断に迷う具体例としては、後述する(20)も「あれは、かごをかき習うの(者)だ」と読めなくもない。

⁶ このうち、現代語の「発見のノダ」と同様の例ではないかと思われる文が 4 例見られたが、事情を推論するノダ文と連続的であるので、いったん「事情のノダ」に入れておく。

⁷ 本発表では～テ、～カラなど理由を表している句を、野村(2019)にならって「理由句」と呼ぶ。

な特徴が明確になるが、実際は述部の情報の重複の具合には様々な程度が見られる。(6)(7)は述部に新情報が見られない例であったが、下例のように情報を補ったり、表現を若干言い換えたりすることも多い。

(8) おれの方でもおめへの仕方が餘まりだと腹の立てゐるはりあいでつい手を揚たのだから勘忍しなせへ（中略）私が身を板しばりにして取らふとした心いきが怖しいからつい腹を立たのだ（花廻志満台二編卷之下 1836）

(9) 強「これさ／＼静にするがいいはな。姉弟喧嘩も久しいもんだあ。自己あ巨細理はしらねへが。お前の災難に逢た事も聞。亦姉さんが何所へか懸合に往といふ事も。些ばかり聞たが。夫につけちやあ自己も助太刀を仕様と思つて。途中から無理に連て帰つたのだあ（花廻志満台四編卷之上 1838）

(8)では、腹を立てたこと自体は発話現場における前提であるが、それに意図性がなかったことが述部の「つい」で足されている。(9)は、頼んだ用を済まさず帰ってきた姉に対して、なぜ何もせずに帰ってきたのかと弟が責めている場面である。その姉弟喧嘩に割って入った話し手が、「助太刀をしようと思って（お前の姉を）途中から無理に連れて帰つたのだ」と発話している。話し手が連れて帰ったことは発話現場において自明のことではあるが、「途中から」「無理に」といった過程の様子が述部で補足されている。

この変種として、理由に当たる内容が発話現場で与えられていて、それを「（ソレ）ダカラ」で受ける「A。B。（ソレ）ダカラ A ノダ」型も見られる。

(10) 吉「ゑゑもうよくべら／＼喋つて 誰が強いなふ 夫だから其様な目に逢んだ わたしの言通り金なんぞを持って歩行せへ仕ねへけりやあ 些とも間違はありやあ仕ねへ。（花廻志満台四編卷之上 1838）

(10)は、追い剥ぎにあった人を見舞っているという状況であり、「そのような目にあう」ことは発話現場で共有されている前提である。下線を付した聞き手の態度を「それだから」で指示しつつ、追い剥ぎにあった理由としてあげつらっている。単純化すると、「最近、ひどい目にあってばかりいる。なんでこうなるんだろう」という人に対して「お前がアホだからこうなるんだ」と言えば、先に述べた「B 理由句 A ノダ」型になり、「お前はアホだな。（それ）だからこうなるんだ」と言えば、「B。（ソレ）ダカラ A ノダ」型になる。

一方、A と B が同一事態ではないのにもかかわらず、「A。B ノダ」が許容されている例が 10 例ほど見られた。これは 2 つのタイプに分けられる。

(11) 美「其気でのろけられちやあ事だね しかし無理はないのさ 程がよくつて男が宜てお金が有といふもんだからね 相替らず御盛かゑ といはれてお樂は両眼に少し涙をうかめらく「いいゑ 美「どうしたのだゑ 又喧嘩でもしたのだね（春色江戸紫二編上巻 1864）

(12) 房「ざまあ見たがゑ 何だ御大そうな 痛いなんのと言掛りはよすが宜 いやになりんこちりんこだぜ。（いやになりんこたうじのはやりことば）お菊は稍有乳をおさへて起なほり 「それじやあ今しがたお言のは 皆空で もう先頃から私が否に成てお在のだね（春色連理の梅四編卷之十二 1858）

(11) はお楽という芸妓が仲間のお美代と会話している場面である。波線を付した部分、お楽が涙を浮かべている様子を見て、お美代が「(恋人の惣次郎と) 喧嘩でもしたのだね」と述べている。このとき A に当たる事態は「涙を浮かべている」、B は「喧嘩をした」であるため、B のノダは、「原因・理由」の直接提示ではある。ただし、話し手が自身の知識を事情として提示しているノダではなく、相手の様子から事情を推論し、把握しようとしているノダである。(12) は、波線を付した部分、相手の悪態を聞いて「さっき言ったのは皆嘘で、前々から私のことが嫌になっていたのだね」と述べている。A は「現在、目の前で悪態をついている」、B は「前々から嫌になっていた」という関係であり「原因・理由」の直接的な提示ではあるが、やはり事情提示ではなく、事情把握である。

次に、同一事態ではないにもかかわらず、「A. B ノダ」型が見られるもう一つのタイプとしては、B が「出来事」でない場合がある。

(13) よね「はいさ酒でも無理にまいらずはとこせへておきますは とすこし鼻であしらひ膝からどんと居る 藤は余程酒がまはりし風情すこし調子高に

藤「をい米八さん今日はどふぞその突かかり口上は一条抜てもらはふよ 突掛けよけりや
あとふから此方で突かかるのだ (春色梅児与美二編巻の四 1832)

(14) 幸なんのまあそんな気の弱ひ事をいはずに。縁と時節のすべをまつがいい。たださへ苦界
のつらひ身のうへ。煩つちやあ。尚更みじめを見るのだ。(花街寿々女 1826)

(13) の A と B は「行為要求」(抜いてもらおう) とその「理由」である。(14) の A と B は「当為的判断」(待つがいい) とその「根拠」である。そもそもノダ文で行為要求や当為判断を受けることができないため、こうした場合は「A. B 理由句 A ノダ」型には合わない。現代語のノダであれば、(14) を「時期を待つがいい」。わずらっては尚更みじめを見るから、「そうするがいい」 のだ」と言えそうであるが、近世期ノダは動詞を受けるものがほとんどで、形容詞に接続するノダは限定的であった(幸松 2024)⁸。

以上、ノダが「原因・理由」の直接提示をしているように見えるケースとして 2 種類を挙げた。前者は発話現場の状況から話し手が事情を把握しようと発話されたノダであり、推論の文であった。後者はノダによって事情を述べられる対象が出来事の文ではなかった。どちらのケースも、A と B が出来事間の関係ではないという点で共通している。こうした場合は「一事態制約」には当てはまらないのであろう。

3.3 「言い換え」のノダ

A と B が同一事態の「言い換え」関係であれば、「A. B ノダ」が現れる。

(15) 里風 あれ／＼みさつせへ。田中のほうから。三まいの早かごがくるが。いまじぶんなぜ
あねへに。いそがせるだろうの

花咲 ほんに何者だろうの こいつはげせねへはへといふうち。早かごは土手のきはまで
きたり。また田中のほうへ。かづきもどす

⁸ 幸松(2024:95)では、近世期資料に見られるノダ系表現 586 例を対象に、ノダに接続する語の品詞情報を調べている。その結果 532 例が動詞接続であり、これは全体の 94% を占める。近代語資料による同様の調査では、動詞接続が 917 例中 738 例であり、全体に占める割合が 80% に落ちるので、動詞接続に偏るのは近世ノダの特徴と言えそうである。

友次郎 あれみさつせへ。かつぎもどすぜ へへきこへた。あれはたしかかごをかき習ふのだ (総籬 1787)

(16) 治「ふむ そうかの 時に此処等の歌妓は直にはなし合がわかるだらうの
たき「あれ もう標緻が能と聞たものだから 左様いふ多性ものだよ ゑゑ 好ねへ
治「なにそうじやあねへが 只きくのだあな (花廻志満台二編卷之下 1836)

(15) では駕籠かきの奇妙な動き (田中の方からやって来て、また田中の方へ担ぎ戻す) を見た話し手が「ああ、わかった。あれは駕籠かきを習っているのだ」と述べている。発話現場で共有されている事態を「あれは」と指示した上で、述部でその解釈を提示している。(16) では、標緻がいいと聞いて急に関心を示すなど多情な男だと指摘されて「ただ聞いているのだ」と述べている。これらは、野村(2019)が中古ナリの例として挙げた「右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなり」のように、発話現場で共有されている事態である A に「表面的・感覚的・知覚的な事態解釈」が表れ、ノダ文である B に「内奥的・裏面的（事情的）な事態解釈」が示される例と言える。

3.4 カラダ

3.2 では、近世ノダによって「原因・理由」提示をする際には「A。B 理由句 A ノダ」型が選好されていたことを見たが、「原因・理由」提示の方法としてはノダの他にカラダもある。本稿の(6)(7)では「米八にすこし頼んだことがあつて來たのだ」「畢竟はおめへの為を思ふからいふのだ」というノダ文を挙げたが、「米八にすこし頼んだことがあつたからだ」「畢竟はおめへの為を思ふからだ」とカラダ文を用いて表現する可能性はあったのかを確認するため、近世カラダによる「原因・理由」提示についても併せて調査を行った。

同資料を用いて、接続助詞「から」を含む文を抽出したところ、1959 例が得られた⁹。「から…」で言いさしている文、前件と後件の倒置によって「から」で終止している文ではなく、ある事態が発話場で前提となっていて、その「原因・理由」を提示するためにカラダを用いている文を確認したところ、9 例のみが認められた。以下に 2 つ例を挙げる。

(17) はる「それでもおまはん一と頻りは。恋みてお在じやあないか
強「これさまた人をいちめるよ ありやあ全体おまへが悪いからだ
はる「なぜ／＼。何の私が知りますものか (花廻志満台三編卷之下 1837)

(18) 仇（中略）下においたる猪口を干顔をしかめて「ああつめてへ
増「それ見なあんまりながいからだあな (春色辰巳園 初編卷二 1833)

このように、カラダによる「原因・理由」の直接表示が確認できたものの、2000 例近い「から」を含む文のうち 10 例にも満たないということ、1700 年代の作品には見られず、1830 年代以降の人情本のみに見られるということで、カラダの定着はノダよりさらに遅れていた可能性がある。そうであるとしたら、カラダの前段階として、迂回的な方法ではあっても「A。B 理由句 A ノダ」を使用する必要性があったとしても不思議ではない。

⁹ 検索条件として「品詞」を「接続助詞」に指定、かつ「語彙素」を「から」に指定して文を収集した。1962 例が抽出できたが、目視で確認した結果、格助詞「から」が 1 例、接続詞「だから」が 2 例紛れていることが発見されたので、接続助詞「から」文としては 1959 例が抽出できた。

4. 調査のまとめ、用法変遷への仮説

以上、近世期ノダのうち、「事情のノダ」と判断できるノダ文を、「原因・理由」の提示であるのか、「言い換え」の提示であるのかという視点、すなわち、時間的・空間的に隔たる2事態を因果的な関係にあるとして結びついているのか、同一事態を別の表現で述べ直しているのか、という視点で精査した。「Bノダ」という形で直接提示できるのは「言い換え」のノダであり、「原因・理由」のノダの方は、出来事間の関係を繋ぐ場合は、原則として文中に理由句を含む形で表現していた。つまり、「どうして来たんだ?」と聞かれて「用があったんだ」という述べ方は難しく、「{用があつて/用があつたから} 来たんだ」型の述べ方が好まれていたのではないか、ということである。これは、野村(2019)が中古ナリで確認した状況と軌を一つにしており、どちらも〔主題-解説〕構造を基盤としている以上、2つの異なる事態を直接的に結びつけるということが難しかったのではないかという事情が垣間見える。

ところが近代以降になると、ノダによる「理由・原因」の直接提示はそれほど珍しいものではなくなっていく。

(19) 殺した理由を云へと云ふのか。(短い間) 仕方がない。矢張云つてしまはう。母は俺にとつて繼母だつたから、それで俺は憎かつたのだ。(雑誌『太陽』 戯曲「生きんとすれば」)

(19)は近世ノダ文に見られなかった「繼母を殺した。憎かつたのだ」型の述べ方になっている。「繼母だったから」という理由句が現れているが、これが「原因・理由」の焦点になつてはおらず、文全体が「原因・理由」の提示になっている。

では、何が契機となってノダの「一事態制約」が崩れたのだろうか。今回の調査を通して明らかになった近代語の様相から、いくつかの仮説が考えられる。

まずは、「一事態制約」といっても<述部が完全に旧情報、理由句だけが新情報>では、述部を述べる意味がない。そのため、実際にはさまざまな程度で情報を足した用例が見られたということは前述のとおりである。現代語で言えば、「あれ? どうして来たの?」と聞かれて「用があつたから、仕事をキャンセルして来たんだ」と述べる場合、述語事態の成立は前提となっているが、「仕事をキャンセルして」という状況語的な成分が足されていて、新情報が混じっている。このような使用を媒介として、徐々に全体が新情報のノダ文が現れるようになったという可能性もある。さらに、本調査の結果からは、事情を把握したり、その内容を聞き手に確認要求する場合には、「原因・理由」の直接提示が可能であった。近世期には「のだね」(事情把握-確認要求)と「のだ」(事情提示)と、形式によって用法が分化していたのが、徐々に「のだ」によって事情把握が行われるようになっていく。形式と用法の合一をきっかけに、「のだね」という確認要求だからこそできた「原因・理由」の直接提示が「のだ」全体に拡張された可能性も考えられる。

さらに、「一事態制約」を突き崩すきっかけを作ったのではないかと考えらえるもう一つの仮説がある。近世期には、準体助詞ノに断定の助動詞相当の終助詞サが接続したノサという形式がノダと同程度の頻度で広く用いられていたことは、すでに幸松(2020)、幸松(2024)などで述べた。近世ノサというのは、近世ノダと、出自としては似た構成要素を持ちながらも用法の上では差異があり、聞き手が知らない(と話し手が想定している)情報を提示するために用いられているように思える例が多い。

同資料から抽出したノサ文 162 例には「一事態制約」が見られず、以下のような「A。B ノサ」が現れ得る。

(20) (店屋が寂れた、という話で) 知らねへやつらが見て悪く評判をしたのさ (甲駅新話 1775)

ノサ文は、聞き手が知らない情報を披瀝するために用いられていた終助詞サ文であったと思われ、中古ナリ文や近世ノダ文とは違って、名詞文構造を基本にしていない。ノサ文が〔主題-解説〕構造を基本としていることは、前提を必要とせずに発話し得したことや、ノサが名詞述語にも後接できた(～であるのさ)ことによって裏付けられる(幸松 2020)。(20)においては「知らない奴らが悪く評判をした」という事実を披瀝するためにノサが用いられているのであって、前後文脈との関係によって、このノサ文が「原因・理由」の提示になっているとも言える、という方が事実に近いのかもしれない。

この近世ノサの用法は、近代に入ってからノダに移し替えられていったと見られるが(幸松 2020)、このノサとノダとの合流こそが、近代ノダの「一事態制約」からの解放をもたらすきっかけとなったという可能性も考えられる。すなわち、1700 年代から「一事態制約」に縛られることなく(20)のような文を許容していたノサがノダに置き替わったことで、「(店屋が寂れたのは) 知らない奴らが悪く評判をしたのだ」というノダが当たり前に現れるようになった、ということである。

今後は、近世末から近代にかけての資料を中心に用例の量を増やして、さらに精緻に分析を進める予定である。

〔引用文献〕

庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
奥田靖雄 (1990) 「説明 (その 1) 一のだ、のである、のですー」『ことばの科学』4 むぎ書房
田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』(復刊 和泉書院 2002 年)
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
日本語記述文法研究会編(2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版
野村剛史 (2015) 「中古の連体形ナリ —『源氏物語』を中心に—」『国語国文』84 卷,1 号, pp.35-56
野村剛史 (2019) 「ノダ文の通時態と共時態」『認知言語学を拓く(成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書)』くろしお出版
山口佳也 (1975) 「「のだ」の文について」『国文学研究』56 pp.12-24
幸松英恵 (2012) 「「ノダ」文による《説明の構造》」東京大学 総合文化研究科 未公刊 博士論文
幸松英恵 (2020) 「事情を表わさないノダはどこから来たのか—近世後期資料に見るノダ系表現の様相—」『東京外国语大学 国際日本学研究』プレ創刊号 pp.162-178
幸松英恵 (2024) 「ノダ文の通時的研究 —「事情を表さない用法」を中心に—」『東京外国语大学 国際日本学研究』4 号 pp.92-110

〔使用コーパス〕

国立国語研究所 (2005) 『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』(2021 年 11 月 24 日確認)
国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 酒落本』(2019 年 11 月 21 日確認)
国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』(2019 年 11 月 21 日確認)